

郷土文化財紹介

伝説と昔話シリーズ

<伝説花馬祭>

馬を飾り立て花馬とし、花馬を道行きし坂下神社に引き入れ、勇ましい花串取りを行う奉納行事は800年の伝統「花馬祭」と詠われてきた。花馬づくりは氏子衆のまとまりを、道行きは見る人達を慰撫し、華麗な花馬と勇壮な花取りを神前で披露し神の加護を得る。造ることと道行きすることと花取りを三位一体とした大がかりな神楽(かぐら)と考えられる。この大神楽の奉納を古より毎年滞ることなく続けてきたからこそ、800年の伝統「花馬祭」と言われるのであろう。



だが、その花馬祭の起源や成り立ちはとなると明確にはなっていない。何人かの先人らが、それらを解きほぐそうと試みられているが、そのことごとくにうなずけるとは言えない。古文書のようなものが無いので、なかなか難問である。

登場人物の主役は、木曾義仲(源次郎義仲)です。場所は美濃国で絵上郷(えのかみごう 岐蘇、木曾)と絵下郷(えのしもごう 坂下)です。時代は平安末期のことです。

平安時代を一言で表すことはできないが、班田制が崩れ経済の根幹は荘園制度となり、これをどう維持するかであった。政治の中心は貴族で、農民はその下で耕作作業を担い生活していた。荘園の持ち主は、天皇家、有力貴族、有力寺社などが主だっ

たところで、そこへ耕地は集約されていった。荘園を警護したり税の取り立てを行う武力が必要となり、武士集団ができてきた。その武士集団の大きな流れが平氏と源氏です。桓武平氏、清和源氏というように元は天皇家の末裔で、有力な武士集団となる。天皇家や有力貴族とも強い結びつきがあった。また、各地へ出向きその土地の有力者とも結びつき、財力・勢力を蓄え殿上人とならんと窺ってもいた。

源氏と美濃国の結びつきは、美濃守を務めた摂津源氏頼光、頼国親子からである。美濃国に土着し土岐源氏などとなっていた。源氏本流は頼光の弟頼信が継ぎ、河内源氏となった。この源氏本流頼信から下ること6代目に義朝・義賢兄弟がおり、源氏本流争いをしており、義朝の子が頼朝で義賢の子が義仲である。義朝の子悪源太義平により義賢は武蔵国大蔵館(現在の埼玉県嵐山町)で殺され、義仲(駒王丸)は木曾へ逃れた。頼朝と義仲は従兄弟でありながら因縁の関係となった出来事である。

この頃、源氏の朝廷内での地位は下がっており平氏(清盛)が力を伸ばしていた。源氏の棟梁となった義朝は、坂東武者などと手を組み南関東で勢力を増した。義朝は都に進出し平氏に対抗するも及ばず、都を追われ尾張国で落命した。こうして南関東に頼朝が育ち、木曾に義仲が育っていくこととなった。頼朝は父義朝の基盤を引き継いでいたが、義仲は木曾中太、弥中太の住む木曾の山奥であった。頼朝の下へは東国の武士たちが多く集まったが、義仲の下へ近隣の信濃国、父義賢のゆかりの地上野国から源氏を含む勢力が集まったという記録はみあたらない。東美濃恵奈郡は遠山荘で藤原氏の荘園であったから、源氏の勢力が荘園管理などを行っていたことが考えられるが、ここからも馳せ参じた記録は見当たらない。

ところが、ここに絵下郷坂下と絵上郷南木曾に義仲挙兵に際しての伝説がある。

義仲の挙兵は、治承4年(じしょう 1180

年)後白河法皇皇子以仁王が全国に散らばっていた源氏に「平氏討つべし」の令旨(りょうじ)を発したことからである。木曾の義仲の元へは4月に令旨が届いたとある。都での源頼政の挙兵は失敗に終わるが、同年9月5日伊豆で頼朝が、9月7日木曾で義仲が挙兵した。兵力基盤の小さい義仲がどのように動いていくのであろうか。坂下と南木曾の伝説はここに関わっている。

明治19年苗木神明神社宮司可知禮蔵氏が記した坂下神社由緒書きがある。これは明治12年岐阜県庁から御達により明細取り調べがあり内務省、県庁、郡役所などへ上申した内容を記したものです。その1節に「義仲居城信州宮腰ヨリ坂下十二社へ社参アリシトキ生憎雨天洪水シ同国筑摩郡山口村マデ来リ渡船能ズ同所ニ於テ遙拝ス之ヲ覗ノ宮ト称シ今猶古老ノ口碑ニ在ス則華表アリ遙拝所是ナリ茲ヲ以テ遠ク往時ヲ顧回スレハ既ニ七百年来ノ久シキニ及フモノト思想セリ往古十二社有之處焼失仕ル由傳エ今モ十二社ノ石場アリ」と記録される。



南木曾町史 p 123 に南木曾の義仲伝説として「神戸のかぶと観音」を挙げ、「義仲が以仁王の令旨によって挙兵し、北陸道をとって京都に進撃する際、木曾谷の南のおさえとして妻籠に砦を築き、砦の鬼門にあたる神戸に祠を建てて、義仲の兜の八幡座の観音像を祀ったのが、かぶと観音のはじまりである」とし、この伝説によって「か

ぶと観音」は木曾谷から東濃に及ぶ広い範囲で信仰されてきたと記される。

義仲の進軍経路については先ず、木曾宮腰を立ち北信濃市原、上野多胡郡、信濃小県と動いたとしている。治承4年9月7日挙兵するが、このとき信濃の平氏勢力と源氏勢力の戦いが北信濃水内郡市原あたりで起こり源氏の加勢として駆けつけたとし、義仲の名が史料にでる初めての戦いとしている。木曾勢のみの軍勢であったと考えられる。父義賢のゆかりの地上野多胡郡へ行き、いくらかの仲間を集めたと思われる。この地は頼朝方に与していたので直ぐに信濃小県に帰り依田城に入った。ここで態勢を整えた時に佐久衆、甲斐衆が集まり木曾衆と併せて3千騎の軍団ができ氣勢をあげたとある。依田城こそが義仲旗揚げの地とする説がある。(ウィキペディア 木曾義仲)

治承5年6月義仲の名を上げることとなる横田河原の戦いへと突入する。先の市原の戦い後、残った平氏は越後平氏城助職(じょうすけより)に下り、城助職の大軍9000が信濃に侵入、川中島の横田城に布陣した。義仲軍3000は依田城を出発し、北上して横田城対岸に布陣した。6月13日横田河原の戦いは火蓋を切ったのである。義仲軍の奇策により越後平氏城助職軍は大敗し、義仲はここに北陸進出の足がかりを得た。(ウィキペディア 木曾義仲)

南木曾町史は平家物語などを参照し横田河原の戦いにおける義仲軍を分析している。木曾衆が樋口兼光・今井兼平・与次・与三・木曾中太・弥中太ら10名、佐久衆は根井小弥太・楯親忠・落合五郎兼行・小室太郎ら15名、小県衆は根津貞行・信貞・海野弥平ら5名、諏訪衆は諏訪次郎・千野太郎ら4名、高井衆は高梨ら2名、上野国から名和太郎・物井五郎・小角六郎ら4名、出身不明が石突次郎ら2名を一覧にしている。義仲の兵力基盤は、佐久中心の伊那を除く信濃全域と上野国の一部とし、父義賢ゆかりの地上野国はすでに頼朝の傘下となっており上手く軍勢を集めることがで

きなかったと記す。だが、これだけの軍勢を集結できたのは、本来は義仲が源氏嫡流であったことによるとしている。

このように見てくると義仲が南木曾や坂下に来るのは、令旨が届いた治承4年4月から木曾をでる9月7日までの4ヶ月の間と考えねばならない。この間の記録はなく次へ話を進めることが困難であるが、先の坂下神社由緒書きの1節をうけて話を続ける。伝説として「山口村覗ノ宮より戦勝祈願の願文を弓矢に結び付け対岸の坂下めがけて空高く射放した。矢文は様子を見ていた坂下の村人の手元へ届いた。願文を読み義仲の並々ならぬ決意を汲んで馬の背に願文の付いた矢を結わえて坂下十二社へ奉納祈願した」とある。

横田河原の戦いで大勝した義仲の下へは各地より兵が集まり大兵力となって北陸を席卷した。養和元年(1181年)大干魃による飢饉となり進軍はできなくなった。寿永2年(1183年)5月俱利伽羅峠の戦いで義仲は平氏軍を討ち破り、勢いを得て7月京の都へ入った。8月朝日の將軍の称号を得たのである。(南木曾町史)

伝説はいう「この知らせが坂下の地に届いた時、村人等は驚きそして歓喜し大騒ぎとなった。朝日將軍を讃えるお祝いをしよう。」こうして花馬祭の原型ができてきたと思われる。花馬祭の形が整って行くにはまだまだ時間を要したのでなかろうか。

鎌倉時代となり恵奈郡遠山荘へは地頭職として加藤景廉が任命され、その嫡男が赴き遠山景朝を名乗り、遠山岩村氏、遠山苗木氏などへと発展した。しかし遠山荘は元々藤原摂関家の荘園なので、両者が共存する地となっていた。この西側には美濃源氏土岐氏が栄えた。(遠山友政公記 千早著)

この時代は農業、商工業、宗教文化の発展する時代でもある。当然人の動きは活発で岐蘇路(木曾西古道 東西交流)と飛信街道(南北交流)の交差点であった坂下の地は人の往来も多くなり集落を拡大していったと思う。宗教活動では修験道が確立されて

いった。修験者、山伏といわれる人達が全国にあふれていた。花馬祭の確立は、この宗教活動によるところが大きいのではないか。西の熊野から岐蘇路を通り入った熊野信仰は、義仲が信仰するところであったから、すでに坂下には根付き坂下十二社として存在していた。北の白山を中心とした白山信仰は全国的な広がりを見せているが、飛信街道を通して坂下へも入ってきていたのでなかろうか。この二つの信仰に注目してみる。

熊野信仰の地で行われている祭りに、熊野本宮で行われる^{おんださい}御田祭(4月15日)があり、参拝者たちが挑花に^{ちようばな}挿された造花を競って奪い合うそう。この造花は福を招くと信じられており、挑花を田に挿すと虫害から田を守ると伝えられている。また、花は実りの始まりであることから、秋の収穫を前もって祝う意味があったと考えられていた。白山信仰の地では、長滝白山神社の花奪い祭り(1月6日)があり、花を持ち帰り豊作や家内安全を願ってきた。いずれも1000年以上前から続けられて来ている行事である。

東、西からまたは南、北から修験者、山伏等が坂下の地に入り村人たちと交わる中で、先に触れた祭などが伝えられた。願文を結んだ矢を馬の鞍に付けて奉納した形から花串を背負う花馬が整えられ、その道行きで花馬行列の風習となり、勇壮な花取りの奉納で締めくくる形を整えたところである。



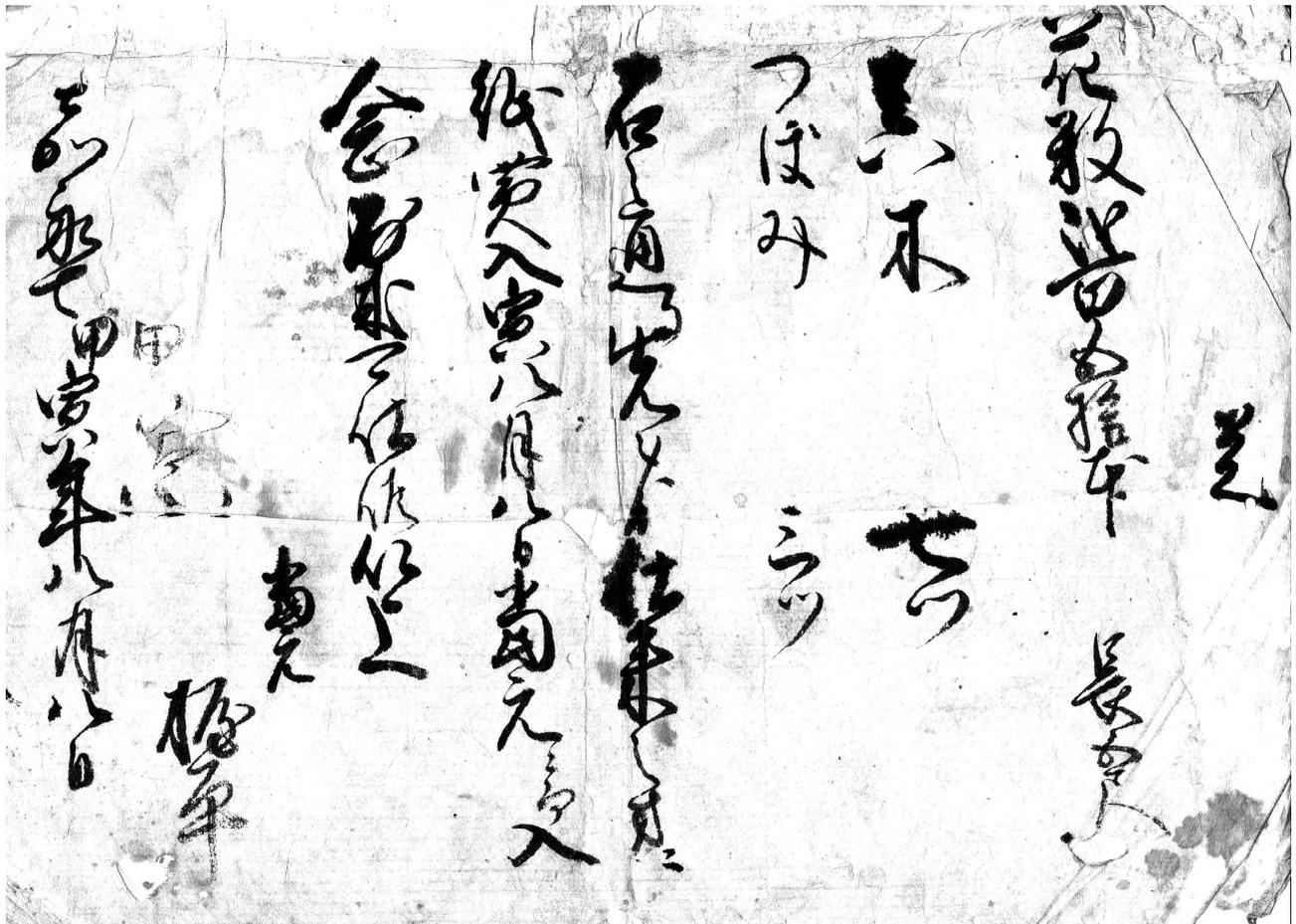
<花馬の花串づくり>

古文書のひとつに下組花馬の花ぐし作りの記録がある。嘉永7年(1854)8月から昭和12年(1937)4月までの83年間毎年記されたものである。花馬祭りについて幾つかのことが分かった。

花ぐしの数は大正10年までは250本、昭和2年まで300本、その後450本となっている。花ぐしの長さは5尺(151.5 cm)。

この古文書は花ぐしを間違いなく作ったという記録で、その日付が明治32年(1899)まで8月となっている。明治5年神社合祀の記録には祭日8月15日と記されているので、坂下の花馬祭りは8月15日(旧暦)に執り行われていたと考えられる。これらの記録は旧暦であろうから、新暦では9月中頃のことであろう。

その後、花ぐしづくりは、新暦の4月や10月と記されるようになるので祭日が替えられたのであろう。



＜もう一つの伝説養徳寺＞^{ようとくじ}

坂下の合郷地域字大門には、中世の寺の遺跡が3つあり、字名として今に残している。字金時寺(きんじじ)、字金剛寺(こんごうじ)、字養徳寺(養徳寺ようとくじ)である。いずれからも中世の焼き物が出土し、養徳寺跡からは茶臼片が出土している。

この養徳寺について2020年2月鎌田盛行さんが、「地元の桂川家先祖墓の中に養徳神の祠があり、桂川家が代々守ってきた。養徳寺は木曾義仲にゆかりの話を伝えておる。」という話をされた。また、鎌田宮雄著「ふるさと坂下」の養徳寺の項に「華再祭養徳神 明治三十一年旧暦八月祭 大祭礼日旧六月二十一日 養徳寺先祖木曾義仲之末子異也」と棟札の内容を記していることを指摘された。「華再祭養徳神」は「奉再祭養徳神」であろう。「養徳寺先祖木曾義仲之末子異也」の解釈をどうするか。疑問としているのか、驚きを表しているのか。「ふるさと坂下」では、木曾義仲の末子は病弱であったので坂下に寺を建て末子を住まわせたとし、養徳寺は木曾氏ゆかりの寺であったとしている。

坂下の古い家系に原氏がある。戦国時代木曾昌義は秀吉により下総(千葉県)へ移封されてしまう。木曾氏の家来達は昌義に従う者、木曾に残る者、他所へ移る者とちりぢりになった。原家が持って見える家系図によると、原氏は久々利(可児市)に住し関ヶ原の戦いの折り木曾奪還に努めた。その後、養徳寺を頼り坂下村大門で帰農したとされる。

徳川幕府は寺院に関する法度を出し、坂下村では行政寺長昌寺と祈祷寺三井寺のみとなった。この折りに養徳寺も無くなったのであろうか。



↑ 写真右に養徳神祠が見える。

